2022年9月10日

#### 出会うということ

一大学での地域連携事業を通じて一

社会学部コミュニティデザイン学科 志藤修史

■真実の中には、個人的な経験を 経て初めて本当の意味が理解でき るものも多い。

> 自由を論ずる政治哲学者 J・S・ミル

#### はじめに(「経験」から「体験」に)

- 「経験」は人を動かす力をくれる一生きていく上での糧一無意識に 積み重なっていく。人により差が生まれる。
- 「**体験**」 はきっかけをくれる一学ぶ上での糧一意識的な行為として 考えている。プログラムによる設定ができる。→プロジェクト方式
- 震災の経験。そこでボランティアを体験した学生は、エンパシー(共感する力)が強く、一緒に何とかしたいという思いがあったように感じる。
- ▶ 大谷大学の社会学部では、この社会を共に生きる者同士、協力しあって 課題の解決方向を探れるような学びをしたいと考え進めてきた。
- ここでは、そのいくつかのプログラムへの学生の関わりを照会するが、 結論から言うならば、どう人と出会うか、出会ったかによって、体験したことのへの理解や、事柄へのまなざしが大きく左右される。

体験型プロジェクト(具体的課題の解決に 向けた活動プログラム)として進める

■取り組むべき課題の明確化⇒具体的方法 ⇒実践⇒課題への影響といったサイクル を念頭に、単年度ごとにプログラムを組 み立て、実践を進めるための、集団(役 割と協力)、財源の確保、報告も学生が 主体的に行うことにしている。

#### 過疎一少子高齢化の進む集落の人々のくら しに出会って

本日は少子高齢化、過疎化の進む地域におけるフィールドワークの取り組みを消化します。

#### (1)京都市北区中川学区

2015年に地元社会福祉協議会から声をかけていただき地域との関わりがスタート。毎年、毎月のサロンやお祭り、地域清掃活動などに参加してきたが、2019年からは地元で取れるお茶を使ってのクラフトビールの活動をしている。

#### (2)京都府南丹市美山平屋地区

2011年の生活実態調査のご縁から関わりがスタート。2018年からは毎年、サロン活動や個別訪問によるちょっとしたお手伝いや話し相手、移動外出問題についての調査などを進めてきた。

# 中川学区の暮らし再発見 一お茶によるビールプロジェクト



大谷大学 社会学部 コミュニティデザイン学科 And House.

第3学年 山田

第2学年 玉川

第2学年 徳山

# プロジェクトの目的

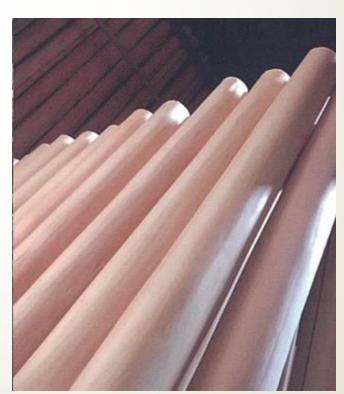
・中川のお茶を使ったビール、「まんまビーア!」を通してより多くの人に興味・関心を持ってもらい、交流人口を増やす

・中川の方と学生と、NPO法人HEROES(西陣麦酒)の連携の拡大

# 中川の説明

・過疎高齢化に直面している中川の動画を御覧ください







## まんまビーア!







・「まんまビーア!」とは

中川では古くから伝わるお茶の木が自生しており、「自然のまま」、「あるがまま」 の形を残したいという、住民、有志の方の願いから「まんま茶」と名付けました

Û

・「お茶復活プロジェクト」を立ち上げ、茶葉の活用法としてビール造りを始めました



# まんまビーア!の評価

#### イベント時のお客さんの声

- ・あっさりしていている
- ・お茶の香りが良い
- ・ビールが苦手だけど飲みやすい

 $\Downarrow$ 

ビールが苦手な若い人、女性でも飲みやすい!

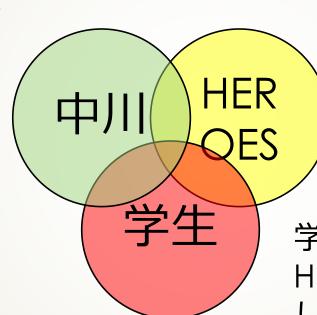


つまり・・・

中川が必要としている「若い人」のニーズに合った商品

# ビールによるつながり

住民はお洒落な商品で 若い人が地域に来る きっかけにしたい



HEROESは、自閉症の 事業所だが、お洒落な ビール造りでイメージ を変えようとしている

学生は中川を元気にしたい HEROESの取り組みを支援 したい

ビールを多くの人に知ってもらうことで、 3者にメリットがあり、結果として中川の課題解決につながる。

# 今年やりたいこと

#### ①生産量の増加

- 現在、茶葉を収穫できるお茶の木が減少しているので、 大学の敷地内で苗木を育てたり、中川の住民の方に協力 していただいて、庭で育てたりしてもらっている
- ・今年は苗木を収穫しやすい中川の平地に植える
- ・将来的に茶葉を収穫できるようにしたい。そうすることで、茶葉がたくさん取れ、ビールをたくさん作ることができる。

- ②新たな取り組み
- ・お茶の実から油を採る
- ・お茶を使った線香の商品開発
- ③情報発信
  - ・SNSの更新頻度を上げる
  - ・ホームページの認知度向上

# 予算の使い道

- ・お茶の加工に必要な機材(かまど、せいろ、鍋)
- ・ラベルのデザイン代(記載内容変更のため)
- ・報告書(中川の住民、関係者に配布)
- ・チラシ(ビールの販売促進用)
- ・その他(交通費、謝金等)

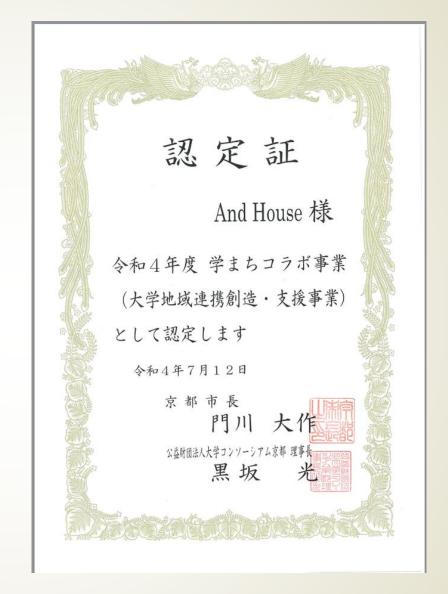
HEROESの協力でビールの売り上げの一部が次年度の中川の活動に充てられます。そのため、ビールが売れるほど、来年以降の中川での活動が充実します。

#### まとめ



・「まんまビーア!」を通して中川のことを知ってもらい、関係人口増加につなげる

・中川の方と学生と、NPO法人HEROES(西陣麦酒)の連携を拡大 し、全員にメリットのある活動をしていく 京都市の学まちコラボ事業に2年連続で認定。



#### 美山平屋地区との交流プロジェクトの概要

・コミュニティデザイン学科での"美山プロジェクト" 過疎高齢化の進む美山町の生活実態と課題および住民活動 を学ぶ、そしてグループ活動を通じて学習研究を深めるとい うことを目的に、平屋地区地域福祉推進協議会、南丹市社会 福祉協議会の方々と共にプロジェクトに取り組んでいる。 →美山町における**「移動と外出支援」**をテーマに、2018年 からアンケートやインタビュー、ワークショップなどを実施 し、課題解決に向けた取り組みをともに考えている。

#### 南丹市美山町の概要

京都府の中央部に位置しており、京都市内からは車で1時間ほどでアクセス可能。

→人口3,784人、世帯数1,754 (2019年4月)、高齢化率は 46.2%となっており、南丹市 全体よりも10%ほど高い。



出典 京都美山ナビ「美山町について」 https://kyotomiyama.jp/information/ about-miyama

#### これまでの移動・交通に関わる調査

・2018年9・10月 後期高齢者を対象とした全数調査

・2019年10月 地域を限定した聞き取り調査

+鶴ヶ岡振興会への聞き取り

・2020年11月 お出かけツアー参加者への調査



#### これまでの調査結果の概要…

#### 2018年:後期高齢者を対象とした全数調査

- ・免許を持っていない人の<u>外出頻度は低い</u>。
- ・外出しない人は「困りごとなし」と答える傾向にあるが、実際 には困りごとは潜在化している可能性がある。
- ・免許を持っておらず、外出頻度も低い人ほど、社協や住民による 送迎を求めている傾向にある。
- ・さらに詳しくみると、社協や住民による送迎を求めているのは独居高齢者に限らず、<u>2人以上の世帯で生活する高齢者</u>も含まれていることがわかった。
- →家族同居や免許保有であっても、対象を限定せずにアプローチを行うことで、潜在化した移動に起因する諸々の生活課題の解決につながる可能性がある。

## これまでの調査結果の概要… 2019年:地域を限定した聞き取り調査

- ・年齢を問わず、<u>自家用車がなければ生活が成り立たない状況</u>にあることが、調査から改めて明らかになった。
- ・調査を行った大内地域でも、近隣住民での助け合いを考えている人もいるが、家族や近所の人には頼めないとしている人もいる:住民相互の乗合のみではなく、より公共的な外出支援策も必要?
- ・自家用車の代替手段に関する認識がやや薄い一方で、車の代わりになる ものや<u>外出支援に対する具体的なイメージが住民の皆さんの中にない</u>、とい うことも潜在的な課題の一つといえる。
- →将来的に自家用車に乗ることが難しくなった時のイメージの共有や、住 民相互で支え合う移動手段の構築、あるいは公共交通充実のための行政へ の具体的な要望などを、ワークショップ等を通じて行っていく必要があるも のと考えられる。







#### これまでの調査結果の概要…

#### 2020年:お出かけツアー参加者へのインタビュー

- ・「お出かけツアー」は、生協と移動販売 の**補完的な役割を果たしている**ことがわ かった。
- ・一緒に出かけること、買わなくても見て 回って楽しむこと、**参加者同士での「動的 なコミュニティ」が形成されている**ことが わかった。
- ・現在は<u>「買い物」が主な目的であるが、</u> 友達と出かけたい、あるいは「お茶をした い」というニーズがあり、今後の発展が期 待される。
- →「買い物」を手がかりの一つとして、次 の移動支援策につながっていく可能性も。





## 2021年度の調査:お出かけツアーの 登録者へのインタビュー調査(自宅訪問)

- ・2020年度と同様、お出かけツアーの登録者を対象とした 共通の質問紙(アンケート)を作成し、学生による自宅訪問 が可能な人には質問紙をもとにしたインタビュー調査を実施 \*自宅訪問が難しい人には、郵送にて返信してもらう
- ・質問紙は、①属性(性別・年齢など)、②日常生活での買い物の状況、③お出かけツアーの利用状況、④コロナ禍での生活の変化、という大きく4つに分かれている
- →実際に自宅訪問してインタビューする際は、内容が少し長いので、お互いが疲れないように時間配分など気をつける。

#### 調査結果の共有

・現地での調査結果の共有と継続的な意見交換会

2018年10月 現地での調査実施

2018年12月 地元住民組織を対象とした調査報告

2019年 3月 地元住民への調査報告・ワークショップ

2019年 5月 福祉懇談会でのワークショップ

2019年 7月 前年度調査をふまえた継続的な調査計画

→地元で福祉活動に資する住民組織や、その他の住民の方々に 調査結果を報告し、課題解決のための方策をワークショップの 中で模索してきた。

# プロジェクトを通じての「出会い」の難しさ

- 生活している背景(地域・年齢・経験)の違い、ギャップが 埋まらない。時間がかかる(1年では難しいー学生は2年半~3年半関わること ができるように組み立てているが、コロナで難しい状況)。
- 「出会い」をめぐる三つの場面
  - ・課題との「出会い」
  - ・地域住民との「出会い」
  - ・友人(学友)との「出会い」

○エンパシー(共感する力)は「出会い」と言う体験を通じてしか深まらない。

#### 「体験」を(から)深める

- 「体験」はあくまで「体験」にすぎない。「体験」を通じて、実態に接近する意 識化が必要。
- 「実態に接近する」ためには、集団(学友や教員・スタッフ)の力が必要→大谷 大学には「地域連携室」があり、プロジェクトのバックアップをしてくれている。

- 地域の課題・くらしの課題は簡単にはとけない。→全ての関わる人の不断の努力と積み重ねが必要。
- ▶ 今後も卒業生の皆さんとの協力は欠かせない。むしろ、広げていかねばならない。